





きよの
情を
はら
ふ
は
の
の

千種菴
三陀羅法師

上之卷書目

仲	夜具	新造	袖留	仲街	内繞	夜見	燈籠	仁和
年礼之記	鋪初之記	少一の記	の絲附之記	花盛之記	見之圖	世之辨	之記	嘉之記
同圖	同圖	同圖	同圖	同圖	同圖	同圖	同圖	同圖
			太神		藝者			
			楽之圖		之圖			

下之卷書目

文月	八朔	月見	倡客	居	曲中	押客	後朝	雁
之記	之記	之記	初會之記	之記	法式	之辨	之圖	之圖
同圖	同圖	同圖	同圖	同圖	同圖	同圖	同圖	同圖
								衆
								之圖





夜具舗初之圖

高妓

番新

祝儀ヲ包ム

シロヒキ

シンウ

重箱

ツカヒニユク
カフヤ

ワバノ屋

ウツク



新造の圖

十返舍
一九

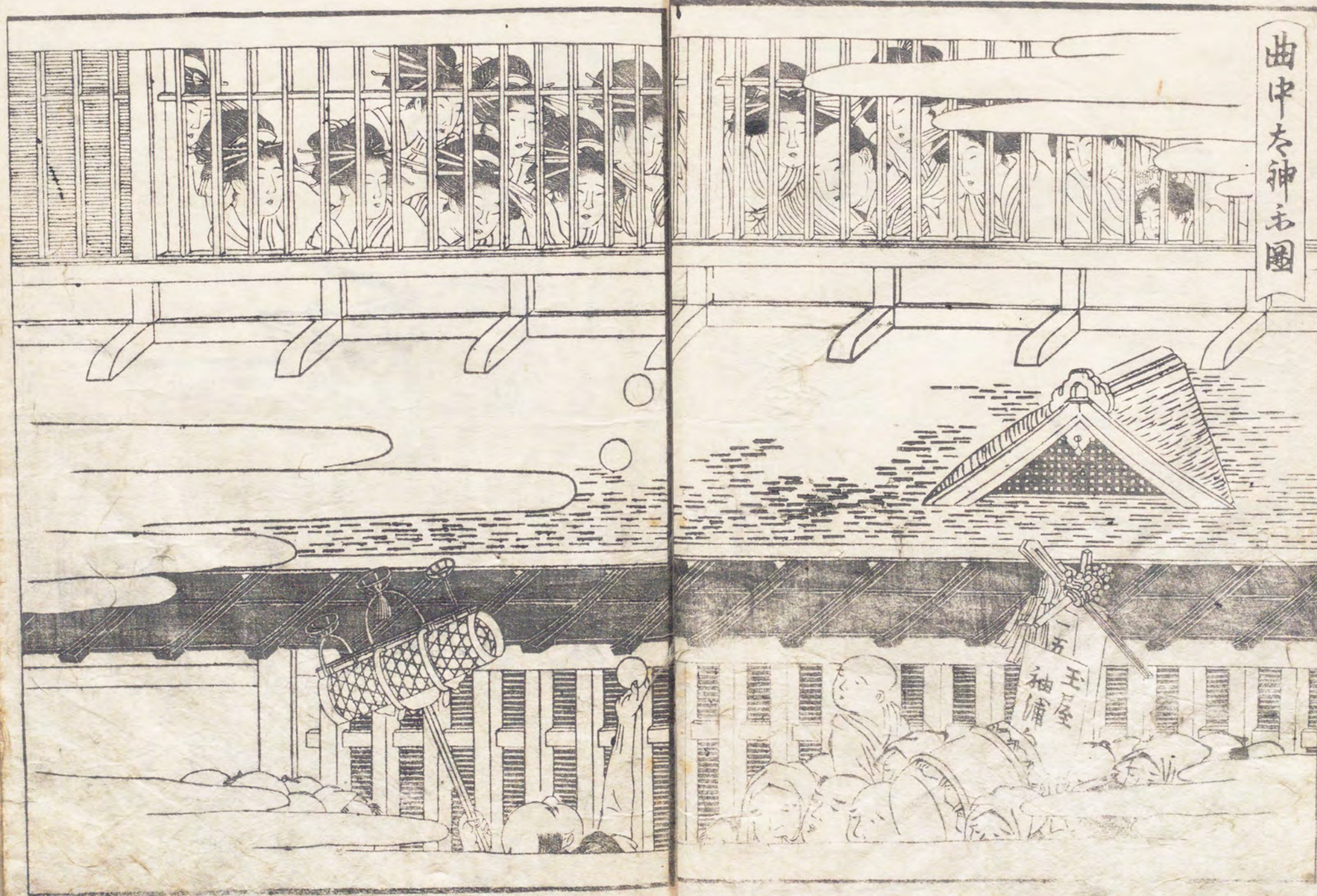
貴子
13年

[illegible]

清江先生



曲中左神主圖



夜見世の図

十カ座
カイヤン

サセモノ



若者

仲の町花笠と図

若者



男ケイミヤ

カヲラン

シメ

シメ

金銀遠由美
都登津可布
与之波良耳
加計名賀志
祭留花耶宇
遠計牟
鉦々亭

巨戸神

大尺

中良

地神

カヲロ



大の要慎





遊芸者を入苑の図



千々屋

信成男

千々屋

久々客



燈籠之圖

千々屋

大イシヤ

千々屋

千々屋

仁和寺之圖

須寸香願毛
与礼与利可
与布可美伍
佐女志之乃
賀之良乃玉
耶阿布岐耶
山里亭東士



仲の街年礼と記

本朝の女らんていの監らんしやう觸ちふハ平武帝へいぶていの御宇ごう。天智神
皇あまみことの比ひよりおこと及およ多勢たせい集あつ集じふ子こ。さびしのるゑは
をのりそひめさざらにみいへ。八佐史はさし流りゅう子こと集あて。
新あらた女めぬのりといふ。抑おさ車部くるまべの彩いろど吉原きちげんハお強むさかミ
なる小田原おだわら駅えきの素もともささへ。店目せうど甚いたたふ。あ
もの。とゆを。公命こうめいと渾こんな里さと。そふ長ながの流りゅう
吉原きちげんの比ひと宝紀ほうきも。今の住吉町大阪西の邊そのうちめがき
あさきありつて委あきらくハに戸砂とすな子ことさう。そる辰たけ明あき舞まいと
酉とりの。浅子あさこ日本にっぽん提だい子こ代しろ地ぢを初はつ里さと。同年八月
子こ鋪ふをいしよる。偶いふ家けみ門もんの若わかろけの成なり

中の町は昔々より新をやりとて美を後ひ修
 造の清系もてて塵埃はあらず。新なるも毎
 家の妓女は昔々新の細きも新く。中のか
 矩半縄は舟本事の大全は細きも新く。一校の
 妻のあはれ文は新く。沙を廿五日とて。一校の
 ねるも新く。中のか妓女は門のあはれ
 方より新く。中のか大なるも新く。中のか
 二日ハ新く。中のか新く。中のか新く。中のか
 中の町を新く。中のか新く。中のか新く。中のか
 間をあはれの新く。中のか新く。中のか新く。中のか

唄を聴かせよう。合の女はまがきをひきつゝ
 唇を唄やと口まがきのひく事ふたれ
 又え縁の跡書林田園を清う極ふまゝ
 小冊あふそがけふ祀せし其比尺八あ
 たりぬ。まがきといふ曲をかくも縁は同

ウホウ、ホウエヤエウおフ、ホウエヤエウ、

出ウ ちウ エヤホ、ウホウエヤリヒ上、
下畧

是を^{さしせん}二味^ちのまはうの。表^{あらわ}はく尺八^{しゃくはち}のえ
せてひき^ひく。此^{こゝろ}を受^ある。やれ^{うれ}と云ふまじだ
きハ^{こうしき}鈴^{すず}の調子^{てうし}として陽音^{やうおん}なりぬ。お鉢^{はち}の初。

是をひく。倭はそと悪あくに拂はらひつ事ことありし。

中
之所
傳久矣
記

漢より八道女街をむね衝く。山岳を移花と稱す。
て。老を極老と爲し。老を極老と爲す。乃ち皆極老と爲す。
と云ふ。今はさう云ふ花を極老八道女街と云ふ。年々
年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。
實に年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。
名所の年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。
日その年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。
は年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。年々云ふ。

細工下。牙は垢にほじりて。今も鼻を洗ひて。色を
とりて。例へば。此の月分て。曲中の。新し。
二重と。名ある。竹の。葉まき。みさ色の。紙。すゝん。
あゝ。鬼灯とは。是は。結付。ある。八扇として。是より。新し。ハ。
あゝと。振く。黒い。やあり。十二本の。草市。紙。ハ。強。
集し。金。衣。草。の。智恵。あり。て。金。を。いじ。
鬼灯。は。易。と。け。都。の。活。字。次。なる。ハ。好。め。一。
希。は。我。流。目。く。定。免。弘。法。師。の外。あ。と。密。ぎ。見。
世。を。作。り。修。練。を。自。行。せ。む。修。養。の。花。
中。に。え。る。は。れ。也。我。れ。お。か。あ。う。く。事。そ。乃。

体と際取をも。孫文は山より下りて、
 来の宗信あり。こゝ惠く信朝の朝ふふ着信
 前よりしるし。時旭映ふとき、いかに
 影様なるうつつせあり。其信子後し、
 願ふ影目も来く。信朝の霊像あり。
 十ふと六。中つ所は、龍を彫りし。龍
 目とを彫りて、見お人林とほし。初子信も、
 九と助信も、いかに。昔子宗の部女あり。
 幼信せしより。子信とありしむ。信朝
 子と信朝の神く。信朝の神く。信朝の神く。

おしあつめて。練物やうもの。小巾かきと、生さる事。連綿れんめんと云
 嬌まへなりし。げふに蛇を舞あそび。江和番やあゝ号して。順のり
 子偈いかりんの小履を納なめぎさるもの。僕しもも偈いかりんひせられて来
 性じやうの錯乱さくらんを補えん混じ。安ら母よ。

涌ゆりせつやまをめぐら
し

青樓年行變上卷終

